

1995.1.17

語り継ぐ教訓

地震保険普及は代理店としての使命



(左から) 岡本 博氏、松山 敦洋氏、多淵 瞳氏

20年の節目に被災代理店が振り返る

自宅が倒壊、次の日に仕事再開
多淵氏

今年1月17日、阪神・淡路大震災発生から20年を迎える。その節目に、兵庫県代協所属の被災代理店に当時のことを振り返ってもらつた。また同代協では20年の震災メモリアル事業を展開している。話を伺つたのは、多淵睦氏（株式会社IMS）、松山敦洋氏（あんしん保険サービス株式会社、同代協常任理事）、岡本博氏（有限会社甲南エージェント、同代協会長兼阪神・淡路大震災20年特別事業委員会委員長）の3氏。その体験談はいすれも生きしく、貴重な教訓として後世に伝えるべきものだった。

— 地震発生時の状況についてお願ひします。

多淵　自宅兼事務所があつた神戸市東灘区は、阪神高速道路神戸線の橋脚が倒壊したあの一帯で、家屋の倒壊など最も被害が大きかった地域です。自宅は全壊でした。

2階で寝ていたのが、西のほうから「ごおー」という地響きが聞こえたと思った瞬間、雷が落ちたようなものすごい

音とともに家全体が傾き、そのまま倒れました。私は頭のほうから後ろ向きに一回転して、寝床から放り出されました。

幸い、いくつかの偶然が重なったおかげで、奇跡的に家族全員がケガもなく無事でした。自宅の南側が臨時の駐車場になつていて、本当だつたら学生だった娘が「死んどつたら声は出ません」と呼びかけると、当時小学生だった娘が「死んで返ってきて、ホッとしたのを覚えていました。

今は笑い話にできるのですが、倒壊した家から何とか這い出し、大声で「みんな生きとるか?」と呼びかけた。震発生時は、すじご揺れ

震災メモリアル事業を展開 経験と教訓を次代へ伝え、つなぐ

免れました。ただ、長年住み慣れた町が一面焼け野原となり、呆然となりました。

時、乾電池式の携帯電話を持っていたので、火災保険を契約しているお客様に片っ端から電話をかんばりました。松山の土木・建築業者として表彰されましたが、店として表彰されることは初めてでした。

た。100メートルほど手前まで火が来ていまし たが、幸い自宅は火災を に来るのはと不安でし た。そこで倒壊した自宅から 仕事関係の書類やパソコンを持ち出し、仮の代理店務所にしました。当 事務所にしました。この年度伸び、その年度 った保険会社の表は、最上級クラス

し、壊滅的な被害となりました。避難した公園からも、この光景を目の当たりにしました。じんじん燃え立つ火の炎が、まるで生き物のように、生き生きとしていました。火事の原因は、車のエンジンから漏れた油が、地面に落ちて引火したことによるものでした。火事現場には、消防車や警笛が鳴る車が駆けつけ、騒音が響いていました。火事の煙が、公園の木々にまかれていたので、煙草を吸っているような匂いがして、とても不快でした。火事の煙が、公園の木々にまかれていたので、煙草を吸っているような匂いがして、とても不快でした。

歩いて5分ほどの事務所
もひどい状態でした。
長田区は、地震直後から大規模な火災が発生
命があつたということ
は、保険の仕事を続けな
さいということなのだと
思います。地震の次の日には
お客様だけでなく
り合いや保険会社
から支援に来た多
さんの物心両面で

れた隣の一戸建ての家は、下からのものすごい力で突き上げられ、左右に真二つに分かれてしまふ。ひどい被害に遭つても、多淵、自宅が倒壊する活、代理店としての活動については。

危険とのセット加入とな
たが、
てはいるわけですから、
の前
の代理店の責任は
常に重いと感じてい
ます。担保協会とも協力
して、情宣活動を含め代

兵庫県代協

阪神・淡路大震災から20年

からの支援に大変感謝しています。あのときの恩返しをしたいという思いは、20年経つた今も忘れず持ち続けています。